

欧州スポーツ雑感

インテルの長友がブレイクしている。スーパーサブからスタメンに定着しそうな勢いだ。しかも、マイコンの代役として右サイドに回ることも試されており、チームにとって貴重な戦力になりつつある。ほとんどの選手には利き足があるから、左サイドをと右サイドでは感覚がまったく違う。野球の左翼と右翼の守備ほどの違いだ。プロ野球で中堅と右翼を守る選手はいても、左翼と右翼をこなす選手はいない。打球のラインドライブの球筋が違うから、目が慣れていないポジションでないとミスが起きる。

ドキュメンタリー番組で紹介されたが、長友には強い信念がある。小柄な選手は体格差を埋めて余りあるプラスアルファがなければならない。それは走力と耐久力であり、体の強さだ。誰よりも速く、そして 90 分通してスタミナ切れせず、コンタクトにも負けない。そのために、ハードなトレーニングを行っている。

これにたいし、シャルケで定位置を占めた右サイドバックの内田には何か足りない。攻撃に絡んで速攻からクロスを送る正確さは評価されているが、コンタクトの強さと足の速さに難がある。CL 準決勝のマンチェスター・ユナイテッド戦はほとんど守勢に立たされたから見るべきところはなかったが、アウェイで唯一の得点をアシストした以外は走り負けしているという印象が強い。急に足が速くなることはないが、もっと走力と体力をつければステップアップできないことははっきりしている。

南米選手権への出場を辞退した日本だが、本田や森本のようにリーグ戦で出番が少なかった選手には絶好のプレー機会だった。しかし、欧州リーグにいる日本選手はチームの戦力になりつつあるので、オフやプレシーズンの期間を真剣勝負の場で使ってしまうと、シーズンに入ってから息切れしてしたり故障したりする。何よりも、真剣勝負では怪我が怖い。それを考えれば、遠い南米まで遠征しなくてよいことを歓迎すべきかもしれない。

男子テニスは次第にフェデラー時代からジョコヴィッチ・ナダル時代へと移りつつあるが、女子は混戦模様だ。次から次へと新しい選手が出て、トップに定着しているのはランキング No.1 のヴォズニアツキぐらいだ。その彼女と伊達公子が全仏選手権の一回戦で対戦した。この対戦を含め、今年に入って伊達は初戦敗退が続いている。ランキングこそ 50 位前後に上がったが、ここは中途半端な位置で、四大大会では上位のシード選手と初戦からあたってしまうポジションだ。185cm、75kg のヴォズニアツキとはまるで子供と大人ほど違う。ヴォズニアツキだけでなく、今は 180cm を越える女子選手が多く、日本の男子選手よりも一回り体が大きい。その中で、40 歳の峠を過ぎた小柄な伊達が闘うのは至難の業だ。

それでも、今年の伊達はかなりの数のトップランクの選手を仕留めた。しかも、そのほとんどが大型選手だ。シャラポワ、サフィーナ、ハンチュコーヴァなど、2010 年秋の伊達はトップ 20 の選手相手に、5 勝 2 敗と勝ち越した。ところが、今年は軒並み初戦敗退だ。どうしてだろうか。

伊達はもともと左利きなので、バックハンドはフォームが綺麗で打球も強いが、フォア

ハンドは肘が伸びたまま、羽子板で当てるような感じで打つ。コースをつくが、球に威力はない。ライジングを捉える打法なので、初めて対戦する相手はタイミングをとりづらく、球が緩いのでついつい力を入れすぎる。伊達と対戦する大型選手は皆、パワーで変則テニスを抑え込もうとするが、そこに落とし穴がある。伊達は器用に球を返してくるから、相手はさらに力で抑え込もうと力んでしまう。こうして相手がイラつき雑になってミスを重ねると、伊達のペースになってしまうのだ。

しかし、復帰 2 年で対戦が一回りすると、相手も戦法を変えてきた。イライラせず、すべての球を強打せずに、しっかりとコースを狙って要所のポイントだけに集中すれば、何の問題もないことが分かってきた。こういう戦い方をされると、伊達はお手上げになる。それにしても、タイムカプセルを抜け出したように、一時代前の選手が現代の選手と闘うのを見るのは楽しい。伊達にはもう少しだけ頑張ってもらい、パワーでないテニスを見せ続けて欲しい。

スポーツの世界を見ていると、成功している選手は頭を良く使い、自分の弱点を克服する努力をしている。その点で気になるのは、大相撲の稀勢の里だ。恵まれた体格と力がありながら、随分と取りこぼしが多い。白鵬との一番の違いは、「差し身」。稀勢の里は脇が甘く、重心も高い。相手に簡単に差されてしまうと、体力があっても押し切るのは難しい。いつも同じ負けパターンをみていると、頭の使い方が悪いのではないかと勘ぐってしまう。自分の弱点を良く知り、それを克服するトレーニングに意識的に取り組まなければ、永遠に同じパターンの繰り返しになる。

もう一つスポーツ選手にとって重要なことは、怪我との付き合い方である。調子が一定しない松坂投手について、球団首脳が無理やり検査を受けさせた。大リーグは投手の肩や肘の故障に細心の注意を払っている。ほんのちょっとした疑いでもあれば、完治が認められるまで、投球を許さない。高価な選手に傷がつけば、台無しだからである。この点で、日本では野球界のみならず、スポーツ界はいまだ「根性」論が支配していて、まったく対照的だ。松坂は問題ないと言い張っていたが、本人の自覚がないと自分でキャリアを駄目にしてしまう。

故障の早期発見・治療は選手生命を維持する上で、一番大切なことだ。一瞬でも痛みを感じたら、すぐそこで止める。筋肉や腱の疲労や傷は初期の段階で安静にするか治療すれば完治も早い。大きく傷つけてしまうと、回復が遅くなる。無理をすればするほど、回復時間が長くなり、慢性化する。監督やコーチの仕事の大きな部分は、選手の体調管理なのだ。マラソンの野口みずきが復帰できないのも、痛めた怪我が完治する前にトレーニングを始める誤りを繰り返したから。怪我が慢性化すると選手生命は終わってしまう。コーチだけでなく、選手の自覚も大切だ。一瞬でも痛みが出たら、そこで止める勇気が必要だ。それはプロだけでなく、アマチュアについても言える。